

フランドルへの道

クロード・シモン
平岡篤頼訳

新しい世界の文学

白水社

訳者略歴
 一九二九年生
 一九五二年早大文学部卒
 フランス文学専攻
 早大文学部助教授
 主要訳書
 アルベレス「現代小説の歴史」(共訳)
 ロングリエ「迷路のなかで」
 デュラス「木立ちの中の日々」

新しい世界の文学 32
 フランドルへの道

定価 六五〇円

一九六六年二月五日第一刷発行
 一九七〇年二月一日第二刷発行

訳者 © 平岡篤頼

発行者 草野貞之

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(21)七八一(代)

振替東京 三三二二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・大光堂製本

(分) 0397 (製) 76320 (出) 6911

Claude SIMON

La Route des Flandres

© Editions de Minuit 1960

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha

フランドルへの道

フランドルへの道

クロード・シモン
平岡篤頼訳

白水社

新しい世界の文学

生きるすべてを学ぶつもりでいたが、
じつは死に方を学んでいたのだった。

レオナルド・ダ・ヴィンチ

彼は手に一通の手紙を持っていたが、目をあげてぼくの顔を見つめ、それからまた手紙を見、それからまたぼくを見た。彼のうしろに、水飼い場に連れて行かれる馬たちの代赭色たいしやくがかつた赤褐色の斑点が行ったり来たりするのが見え、あまりに泥が深くてくるぶしまでもぐりこんでしまうほどだったが、いまでも覚えているのは、たしかその夜の間に急に氷がはりつめ、ワックがコーヒーを部屋に運んできたとき、犬どもが泥をくらったぜ、といったことで、ぼくは一度もそんな言いまわしを聞いたことがなかったから、まるでその犬どもとやらが、神話のなかに出てくる残忍な怪物のように、縁が薄桃色になった口、おおかみのように冷たい白い歯をして、夜の闇のなかで真黒い泥をもぐもぐ嚙かむ姿、おそらくなにかの思ひ出なのだろう、がつがつした犬どもが、すっかり平らげ、地面をきれいにしてしまう姿が目映るような気がしたのだ。いまは泥は灰色をしていて、われわれはいつものように朝の点呼に遅れまいとして、馬の蹄ひづめのあとが石みたいにこちこちに凍った深いくぼみに、あやうく足首をくじきそうになりながら、足をよたよたさせて走っていたところだったが、すこしたって彼が、母上から手紙をちょうだいしたよといった。やっぱり、やめてくれといっておいたのに母が、勝手に手紙を書いたのであって、ぼくは自分の顔があかくなるのがわかり、彼も微笑かなにかそういう表情を浮かべようとしてだまりこんだが、きつと彼には、愛想よくすることでは無いとしても（たしかにそうしたいとは望んでいたのだから）あのよそよそしさを抹消することはできなかったの

にちがいない。その表情はわずかに、ごましおまじりのごわごわしたちよび髭^{ひげ}を左右に引きつらせただけで、年じゅう戸外で生活している人間に特有の、あの渋色に日やけた顔の皮膚、くすんだ色の皮膚には、どこかアラブ人的なところがあり、きつとシャルル・マルテル（カペー王朝時代のアンジュが殺し
一八一二年七月二九日）そこねたアラブ人のだれかの名残りのだろう、だから彼はおそらく、タルン県（南フランス）の彼の隣人である小貴族たちとおなじように、《わが家の祖先聖母マリヤ》の後裔^{こうえい}だと自称していただけでなく、さらにその上、きつとマホメットの子孫だとも称していたにちがいない、われわれはいずれにしろ親戚だからね、そう彼はいったが、思うに彼の頭のなかでは、すくなくともぼくに關しては、親戚というそのことばはむしろ、蚊とか虫とか蛾^がとかなにかさういった程度のもを意味していたようで、またしてもぼくは、彼の手のなかにその手紙を見つけ、それがだれの用箋^{ようせん}かわかったさっきとおなじように、怒りで自分の顔が赤くなるのを感じた。ぼくは一言も返事せず、きつと彼にもぼくが不機嫌になっているのがわかったにちがいない、彼ではなくその手紙ばかり見つめ、彼からそれをとりあげて、破り捨ててしまいたかったくらいで、ひろげたその手紙を持った手を、彼がすこしばばたさせると、その紙の角が冷たい外気のなかで翼^{よく}のようにはためき、くろい彼の目には敵意もなければ輕蔑^{けいべつ}もなく、好意的でさえあったが、その目もやはりよそよそしく、しかしおそらくは彼も、ぼくとおなじ程度にいらだっていただけで、凍^こてついた泥^{どろ}のなかにさうして突^つつ立^たって、不幸にしてぼくにっては母であるひとりの女性にたいする心づかいから、二人が慣習^{かんしやく}というものの礼儀^{れいぎ}というものにそんな譲歩^{じやうぽ}をして、そうしたささやかな社交界的儀式^{しぎし}をつづけている間も、ぼくが先にいらだつたことを思に着^きいたらしく、そのうちにきつと氣がついたのだろう、ちよび髭^{ひげ}がまた動いて、怒^{いか}ったりするもんじやない、至極^{しごく}当然^{たうぜん}のことだ母親が……むしろさうしてもらってよかったよ、わたしとしては満足しているのださうして……万^{ばん}一^{いつ}困^こるようなことがあったら……そこでぼくが、ありがとうございます

大尉殿、すると彼が、もしなにか困るようなことがあったら遠慮せずにはわたしに……そこでぼくが、はい大尉殿、彼はもう一度手紙をひらひらさせ、たしか早朝点呼のおよそ七分前か十分前だというのに、そのことにさえ気がつかないような様子なのだった。水を飲むと馬たちは、二頭ずつ、速歩はやあしでもと来た道を帰ってゆき、兵隊たちがその真中を、馬をどなりつけたりふざけて軽勒けいれきにぶらさがったりしながら駆けてゆき、凍こてついた泥に蹄ひづめの音がひびくのが聞こえるのだったが、彼はもう一度、もしなにか困ることがあったらよろこんでわたしが……といって、それから手紙をたたんでポケットに入れてまたぼくに向かつて、彼の気持ちとしてはやはり微笑かなにかのつもりらしかったが、もう一度ごましおの口髭くひげを左右に引きつらせたにすぎないあの表情を見せ、そのあとで回れ右をした。のちにはぼくは、思いきってそれまで以上に手間をはぶき、極端なくらい仕事を簡略化して、馬から降りるそのついでに両方の鐙革ようがをとりはずし、一、二度飲みすぎないようにストップをかけるとすぐ咽喉のど革の尾錠おしんもはずし、馬勒ばうく全体をいっぺんに持ちあげ、馬が水を飲んでる間にその全部を水に漬け、それから馬がひとりで厩舎うしやに帰り、ぼくはいつなんどきでも耳をつかまえられるようにそばを歩くだけで、あとは鉄かねの部分ぶぶんを布でふき、ときどきあまりさびがひどすぎるときだけ布やすりをかけさえすればいいようにしたが、いずれにしろそれまたいたした変化ではなく、なにしろその点に関しては横着者というぼくの定評はとくに確立されていたから、みんなあきらめてぼくにうるさくいわなくなっていたし、それに思うに、彼についていえばそんなことにはまったく無関心で、小隊の査閲をするとき多くの姿が目にはいらぬふりをするのも、たいして手間をかけずにぼくの母に敬意をはらう一手段だったにちがいない、そうでないとすれば彼にとっては、洗ったりみがいたりする作業もあの無用でとりかえのきかない習慣、いうなれば遠い祖先の時代からソーミュール（ロワール川にのぞみ、一七六六）（年以來有名な騎兵學校がある）に保存され、さらにのちになって強化されるにいたった反射運動はんしゃうどうというか伝統的しきたりの一部をなしてい

ただで、ひとの噂^{うわさ}によれば彼女が（つまり彼が妻とした、というかむしろ夫として彼を選んだ女、つまりあの子供のような女が）、彼の好むと好まぬとにかかわらずたった四年間の結婚生活のうちに、そうした伝統中の伝統をなす若干のしきたりを彼に忘れさせるかそうでなくともとにかく廃物化することに貢献したということではあるが、しかしかりにもし彼がそうしたしきたりの若干を放棄したと仮定しても（それもおそらくは愛情によってというよりは力づくで、というかい方をかえれば愛情のちからによって、というかまたいい方をかえれば愛情に強制されてであろうが）たとえその氣になつてどんなひどい愛想づかし断念をもつても忘れさせることのできない物ごとというものがあり、一般にそれはいちばんばかげていて意味の空疎なもの、理屈で云々^{うんぐん}することもできなければ意志で左右することもできないもの、たとえば垣根のうしろから例の機銃掃射が鼻先をおそったとき彼がサーベルを抜いたあの反射運動に類するものなのだ。しばらくぼくはそうして、彼が腕をふりあげ、たぶん何世代にもわたる過去のサーベル使いたちからうけついだものなのだろう、騎馬像の伝統的な姿勢でなんの役にもたないばかりしい武器をふりまわす姿を見ることができたが、逆光にくろぐろと浮かびあがつたそのシルエツトは色どりを失い、まるで馬も彼もいっしょにおなじひとつの材料、なにか灰色の金属に鑄込まれでもしたかのようで、日光がしばしばだかの刃の上にきらめき、ついで全体が——人も馬もサーベルも——ちょうど鉛の騎兵が足から溶けていつてはじめゆっくりと傾斜しついでだんだんはやく横倒しになるようにそっくり片側に倒れ、依然として腕の先にサーベルを握ったまま焼くくずれてそこに遺棄された大砲の残骸、生きものののように子をはらんで腹を地面に引きずってゆく雌犬のようにあられもない姿のその残骸のむこうに消えてゆき、ひび割れゆっくり焼けこげてゆくそのタイヤから立ちのぼるあの焼けゴムの悪臭、春の午後のきらめくひかりのなかにただよう胸のむかつくような戦争の悪臭が、ただようというよりはむしろねばねばして透明だがまるでた

まり水のように目に見える沈殿物となつて、赤煉瓦の家々果樹園垣根がそのなかに浸っているかのようだった。一瞬処女のように純潔な鋼ハルの上に、一秒の何分の一の間だけありつたけの光と輝きをとらえ引き寄せでもしたかのよう、引つかかたというよりむしろ凝集された日光の目もくらむような反射……　ただ、処女かどうかという点だけについていえば、彼女が処女を失つてからすでに久しかったが、思うに彼女と結婚することにきめたとき彼が彼女にもとめ期待していたのはそんなことでなく、おそらくその時からすでに完全に自分の運命を知っていたのであり、いうなればあの『受難』を前もって受けいれ引き受け前もって成就していたかのようで、ただひとつのちがいはこの『受難』の場所中心祭壇が禿山はげやまではなくて、あの甘美で優にやさしくめまいするような茂みのかげのひそかな肉の壁……いやはや、十字架にかけられ息たえだえといつてもその祭壇はあの入り口穴ぐらで……

だが要するに例の禿山（キリストが磔刑に付されたゴルゴタの丘）にだって娼婦もいたはずで、ああしたことには娼婦の存在、涙にかきくれ腕をよじつてもだえる女たち悔いあらためた娼婦たちの存在は欠くべからざるものなのらしく、ただそれも彼が彼女に悔いあらためることをもとめたかすくなくともそうすること、もっぱらの定評ある女とはちがつた女となることを期待し、したがってこの結婚から当然将来するはずの結末とはちがつた結末を期待していたとしての話で、じっさいにはもしかすると彼はあの最終的な帰結というか結論あの自殺さえ予見していたかすくなくとも考慮に入っていたかもしれず、結局戦争がその自殺をスマートな私たちですなわち地下鉄に飛びこむ女中たち部屋じゅうに血しぶきを飛ばす銀行家たちみたいにメロドラマふうな仰々しいきたならしい方法ではなくて事故に偽装して、といつても戦場で殺されることを事故とみなすことができるとしたなら話だがとにかく事故に偽装して遂行する機会を与えたのであり、彼はいわば思慮と適切な状況判断をもつて与えられた機会を利用し四年前本来なら始めるべきでないのに始めたあの経験の最後をしめくくつた……

ぼくにはそのこと、すなわち先ほどから彼が捜しもとめ期待していたのがほかでもない弾丸^{たま}にあたることだということがわかっていたが、それはなにも彼が道路のまん真中のよく見える場所に馬をとりめり^いんごの木の下までその馬をすすませる手間さえかけずというかすすませる手間をかける気配さえ見せずじつとその場に停止していたそのときにはじまったことではなく、それなのにあの青二才の少尉の間抜けときたらきつとそれが騎兵科將校にとつての至上至高のしゃれてりっぱで粹^いな行動とでも思つたのか自分も彼のまねをしなればならないなどと思いこみ、相手にそんなまねをするようしむけていたほんとうの理由すなわち名譽心とか勇氣とかの問題ではなくいわんやしゃれっ氣どころではなく純粹に個人的な問題それも彼と彼女との間というより彼と彼自身との間の個人的問題だということなどつゆ氣がつかないのだった。そのことをぼくから少尉にいつてやることもできたろうし、イグレジアならぼく以上にうまくいつてやることのできたにはちがいない。だがいつてやったところでないになつたろう。思うに少尉はそうすることで自分がなにかまったく驚嘆すべき行為をしているのだと確信しきつていたにちがいはなかつたしまだすくなくともそうして名門ド・レシャック家の人間と枕をならべおなじ死に方することに満足して陶然とさえして死んでいったのであるからにはわざわざその夢をさます必要など毛頭なかつたわけ、じっさい彼がそう信じこんでいたほうがよかつたじっさい彼が間抜けで、あの顔の背後になにがかくされているかなど怪しまなかつたほうがいつそよかつたのであつて、あの顔はほんのかすかにうんざりした表情を浮かべほんのかすかにしびれをきらせた様子で敵機が遠ざかつてわれわれが壕^{ぐら}から出てくるのを待っていた待つという譲歩をわれわれにたいしてしていたというよりはむしろ野戦軍務規定と低空掃射を行なう敵機の攻撃に遭遇した場合とるべきとされている処置にたいして譲歩して、鞍^{くら}の上でわずかにうしろをふりかえりすこししびれをきらせていた、とはいえそんな自分をおさえあの依然として底の知れない表情のない顔つきを見せていま

は地平線上にけしつぷほどの大きさとなった敵機が見えなくなりわれわれがふたたび馬上の人となるのだけ待っていたのであって、われわれが鞍にまたがるやまるで馬がひとりでに歩きだしでもしたというふうな脚でそれとわからぬくらいかるく馬の脇腹を圧迫し相変わらず並み足でもちろん急ぐでもなくのろろするでもなくといって無頓着というのでもなく、つまりただのふつうの並み足ですすんで行くのだった。きっと彼はどんな大金をやるにしても速歩に移ったりなどしなかったろうし、大砲の弾丸がとんできても拍車を入れたり居場所を変えたりなどしなかったにちがひなくまさに大砲弾丸でも動かないとはこのことでこんなふうにびったり適合する表現というものがままたるものだ。そういうわけで並み足ですすんでいったのだが、それも四年前に彼がはじめたあの経験の一部をなしていたのにちがひなく、すでにそれに結着をつける決心をしていまでも悠然と無表情に（同様にイグレジアのいうところによれば、彼はいつでもなんにも気がつかないふりをし、嫉妬にしろ怒りにしろどんな些細な感情をおもてに出さなかったということだが）無表情に前進してゆきながらそれに結着をつけつつあったというかむしろつけようとつとめていたわけでその彼がいますすんでゆく道もいわば闊歩かなにかすなわち戦争でなく殺人にもつてこいのところ、村祭りの射的みたいにゆうゆうと生垣か灌木の茂みのかげにかくれ好きなだけ時間をかけゆっくりねらいをつけ、うーんとうなる暇さえ与えずに射殺できそうな場所、つまり文字どおりの暗殺に最適の場所で、しばしばイグレジアもそこであえなく殺されることを彼が期待していたのではないか、自分自身のけりをつけるとはいえそれと同時にながらく望んでいた復讐への渴望をもみたそうとしていたのではないかと疑ったが、しかしよくよく考えてみればやはりそうとも思われずかりにもし彼がイグレジアを恨んだことがあったとしても結局あの男を自分の手もとからはなさなかったのであるからにはこのときの彼にはすべてがどうでもよくなっていたにちがひなくいまとなつてはあの男のこともぼくやあの少尉の間抜け

とおなじ程度つまり全然問題にせず個人的にわれわれにたいしてというのではないが將校としての自分の役割自分の職務にたいしてもうどんな義務にもしぼられていないと感じ戦争がこんな段階に到達した以上その点に關していまさらなにをしようとするはすまいともうどんな重要性もないとおそらく考えていたのだらうと思われた。したがって中隊の実人員がわれわれ四名に縮小されてしまったそのときから（この中隊自体が連隊の全兵力のうち最後までこの兵員のほぼすべてであとはおそらく馬を失った何名かの兵が自然のなかをそこかしこさまよっているくらいだったから）彼は軍人としての義務から解放され自由になりいわば任務を解除されていたわけなのだがそんなことにはおかまいたしに彼は依然として馬上に毅然として直立してまるで七月十四日（革命記念日でフランス國の國兵式が行なわれる）の國兵式に行進してでもいるかのように毅然として直立していたのであり、ところがじっさいにはわれわれはいっさいの解体とでもいふべきもののまったなかを後退のいやむしろ敗走のいやむしろ潰走の真最中でまるでそれは軍隊だけではなく世界そのものの全体がその物質的現実性の面だけでなく人間が頭のなかに描くことのできるそのイメージの面でも（もっともそれもおそらく睡眠不足のせいこの十日間というものの馬上以外でほとんど眠っていないということのせいでもあったらうが）引きちぎられればらにこなごなにどろどろになり影もかたちもなくなってゆきつあったかのようで、二三度だけかもうあきらめると彼にどなったが（それが何人かもだれかも知らないが、ぼくの想像では家屋のなかや塹壕のなかにかくれた負傷兵か、あるいは不可解なくらい執拗にあたりをさまよっていた民間人たちかも知れず、彼らはパンクしたトラंकを引きずったり得体の知れない荷物をつんだ乳母車を押し（荷物とさえもいえないがらくたおそろくはなんの役にもたないがらくたで、きつとただ手ぶらでうろつかないためなにかを運びだしたのだという感覚幻想におぼれるため、価格とか貴重品とかの恣意的な觀念と結びつけることさえできればいいのだからなんでもいいなにかを——中味のはみだし

た枕こうもり傘祖父母の天然色写真でも——所有しているのだという幻想におぼれるためだったのだらう。まるで大切なのは歩くことで、それがこの方角であらうとあの方角であらうと問題ではないといった様子なのだった、もっともぼくもとくと彼らを眺めたわけではなくぼくの目に映っていたもの標的のように目じるしのようにまだどうにかぼくにそれとわかったものといえ、鞍の上にすえられたあの骨ばってやせて毅然として直立不動の背中と、肩胛骨の対称的な突出部だけわずかにほかよりびかびかしているサージの軍服とだけで、だいぶ前からすでにぼくは道ばたで起こっていることなど興味をもたなくなつて——もつことができなくなつて——しまつていた)、というわけなにごとか(警告か忠告か)をどなる非現実的であめくような声が聞こえたのだったが、それがあの春の日のまぶしいような半透明の光(まるで光そのものがよこれ、まるで目に見えない空気のなかにきたないにごつた水のように戦争のあのほこりっぽい臭い垢みたいなものが懸濁しているかのような)そんな光をとおしてぼくの耳に達し、彼はといえ(そのたびに頭部が動き、鉄かぶとの下に斜めうしろ向きに顔のはしの線、額眉毛のきついそっけない輪郭、その下に目のくぼみの切りこみ、ついで頬骨から顎までまっすぐに降下するきりつとしたそっけない微動だにしない線があらわれるのがぼくに見えるのだったが)彼らを見つめ、その表情のない無関心なまなざしをしばし(といつてもあきらかにないも見ていないのだが)自分に呼びかけた男の上に(とさえもおそらくいえないくらいで、ただ声がやってきた場所地点に)注ぐのだったが、それは非難するきびしいないし憤慨したまなざしですらなく、眉をしかめることすらしない、ただいつものまったく表情の関心のないまなざし——せいぜいおどろきの感情を示しているくらいで、いくぶんあつけにとられいららし、まるでそれはどこかのサロンで紹介されもしなかった人間にいきなり話しかけられたとかないかいている真最中に見当はずれの差し出ぐちで(たとえば葉巻きの灰がいまにも落っこちそうになっているとかコーヒーがさ